



銃



肥後銀平

銃が欲しいという人がいて、私が、誰か殺したい人がいるのか、それとも自殺に使うのですかと聞くと、自殺に使うのだという。私の家には昔戦争で使われたとかいう拳銃があつて、弾もある。古びているが銃であるから、頭の近くで撃てば一人簡単に死ぬだろう。死にたい死にたい言う人は大抵口だけであると思つて、私は少し意地悪する気持ちで、銃があるから死ぬのに使つてください、その代わり、死ぬ時は私の前で死んでくれませんかと言つと、彼は快く私の提案を受け入れて、銃を受け取つた。ですが、今は死ねませんと言つので、ああやはりこの人も端から死ぬ気がないのでと落胆すると、それが伝わつたらしく、いやいや他人を打つならばまだしも、自分の頭を撃ち抜くのは自分の力ではできないのです、銃がこの人を殺してあげようという愛情を發揮して初めて、死ぬことができるのです、つまり厳密に言つと自殺などできないのです、銃に力を貸して貰うのです、とすぐさま言い足した。私は、なるほど、確かにそういうこともあるかもしれない、切腹をする武士は刀を愛しただろうし、自決する軍人は銃を愛しただろう、あの有名なロックスターも作家も銃を愛したということか、と思つた。練炭で死んだ人は練炭を、毒薬で死んだ人は毒薬を、ガスで死んだ人

はガスを愛したのですか、と聞くと、彼は、そうです、自分ではガスは殺せません、と答えた。
 私が忘れた頃になつて彼はやつて来て、銃に愛情を注いだので、出来るかどうかわかりませんが、今やつてみましょうと言つた。彼はこめかみに銃口を当てて、ゆっくりと引き鉄を引いた。ばーんと地面が震えたと思つたら耳が震えたのだつた。銃を当てたこめかみから紅の花が咲いたと思つたら、脳髓や血が逆側から飛び出して地面でべちゃりと音を立てた。そのまま心持ち弾が出つた方向に身体が倒れた。死んだ彼は安らかな顔をしていた。
 その安らかな死に顔を見ると、死ぬのも悪くないという気がして、私は、彼の掌からこぼれ落ちた銃を拾つて、弾が籠められているのを確認すると、銃口を額に当てて引き鉄を引いて見たが、弾は出なかつた。銃に愛情を注がなければいけないという彼の言葉を思い出した。しかし銃に愛情を注ぐというのはわからない。わからないから、丁寧に銃を手入れしたり、布団に入れたり、話しかけたり、供え物をしたりした。毎日そんなことをしているから、私は銃で頭を撃ち抜いて死ぬのが楽しみになつた。

しばらくして、もう充分愛情を注いだらうと思って、私は額に銃口を当てて引き鉄に指をかけた。興奮で手が震えて二三次跳ね返された後、ようやくしつかりと引いたが、また弾は出なかった。私は苛立った。愛情を注いだというのに、銃は応えてくれなかった。

私は銃を愛することをやめて、ロープやナイフを愛そうとしたが、やはりそれらは応えてくれなかった。一つのを愛せない者に、他のものを愛することなどできないのだった。ロープは途中で切れてしまったし、ナイフは手首の皮膚の表面しか切ってくれなかった。

新聞を見ると、テレビスターが手首を切って死んだと大げさに書かれていた。この人もまた愛したのだと思った。どう愛したのか知りたかったが、死人は教えてはくれない。

銃やナイフの愛し方はわからないままである。私は世の中が悲しい理由がこれでわかった。